

高崎ユネスコ協会賞

未来へ羽ばたく文化財

高崎市立南八幡中学校 一年 高草木 愛美

私は、中学校の授業でふるさと学習講演会に参加し、平成二九年にユネスコ「世界の記憶」に登録された上野三碑について詳しく勉強した。今まで知らなかった新たな発見もあり、よりよい学習をすることができた。その学びの中で、私が印象に残っている古碑は、自分の住む地域に所在する山上碑だ。完全な形で残る日本最古の碑、日本語の語順で文字が刻まれた最古の日本語碑である。同時に、放光寺の長利という名の僧が、自分を育ててくれた母への感謝と供養のために建てた石碑に感めいを受けた。

山上碑は、私と祖父母の思い出の場所だ。歴史や文化財などに興味・関心を持つ祖父母と私は、散策をしながら山上碑に出かけていた。しかし、三年前に祖母を亡くしてからは、山上碑を訪れていない。その思い出の地に行くことにより、祖母の死を現実を受け入れてしまう自分を、認めたくなかったのかもしれない。祖母が他界してから、祖父は元気がなくなり笑うこともなくなった。私は、いつか時間が解決し、前を向き希望をもってくれるはずだと信じているが、残された人にとっては悲しみ苦しみを乗り越えるには、時間がかかると実感している。学校での学び学習との出会いにより、祖父に未来を切り開いてほしいという願いをこめ、三人の思い出の地をそのまま心の中に閉じこめるのではなく、山上碑に再び行くことを決意した。そのことが、祖母への供養になるのではないかと思った。

実際に、長い石段を登り、山上碑にたどり着くと言葉が出ないほど感動した。祖父は、大粒の涙を流し泣いていた。石碑に重ねられた祖父の背をみて、昔の古い石碑というだけではなく、古い時代の人々の人生が積み重ねられているように思えた。未来へと羽ばたき、生きていく力強さが語られていた。人は、人と人との行動や言葉のつながりの中で、心の気持ちに寄り添い合いながら、生きているのだと思っていた私だが、それだけではないと気付いた。長い月日の歴史ある文化財などからも、人は心が救われ目には見えない心の思いを受け止め、共感し心を支えてくれると思えた。帰り道の祖父は、心に変化が見られた。祖母との別れの苦しみ悲しみが和らぎ、明るい未来へ新たな道を歩み出すことができる望みが見えた。

長利は、自らの存在を後世に伝えるために石碑を建てたと考えられているが、母への愛を通して思いやりと感謝をもつことの大切さを、後世に残してくれたようにも感じる。文化財は、歴史的側面だけを見て考えるのではなく、その時代に生きていた人々が何を伝えたかったのかも考える必要があるのではないか。心にひびくことを伝えたかったものは何か。それは、文化財を観た人個々が感じとるものである。観た人がその時の状況や抱いている感情が違いう中で、一つでも多くのことを感じとることができればよいのかもしれない。

私が祖母との思い出が永遠に心に生き続けているように、昔の人々が残した貴重な歴史

文化遺産を守り、未来へと継承していくことが大切だと考える。そして、生まれ育った自分の地域の郷土文化財に誇りをもつとともに、多くの人に伝えていくことも私達の使命だと思う。美しくすばらしい文化財を守り続けることにより、人は心が豊かになる。全ての人を尊敬する気持ちを育むのだ。人間と文化財が共に生きて通じ合うことにより、幸せの輪を作り出せるのだろう。

私は、文化財のような堂々とりんとした人の役に立てるおだやかな人になりたい。そして、周りの人を幸せにする存在であり続けたい。最後に、中学校で学びの場を作り、魅力ある文化財にめぐり会えた授業に感謝をしたい。